

群 教 ゼ	G10 - 01
	平 15.211集

# 互いに尊重し共に生きようとする態度 を育む道徳教育の工夫

## － 「国際理解」の価値の重点化と地域に生きる ゲスト・ティーチャーとのTTを通して －

長期研修員 田沼 正一

### 《研究の概要》

本研究は、道徳の授業において国際理解に求められる互いに尊重し共に生きようとする態度を育むために、重点化した価値の関連を図り、ゲスト・ティーチャーとのTTの連携について、実践的に研究したものである。具体的には内容項目の「自他の尊重」「郷土愛」「愛国心」「国際理解」「人類愛」をつなぎ、現実の問題を克服するために自他のよさに気付き、実際の人や文化とのかかわりを通して尊重し共生していこうとする態度を育むものである。  
【キーワード：道徳 中学校 国際理解 伝統文化 価値の関連 ゲスト・ティーチャー】

### 主題設定の理由

#### 1 群馬県の道徳教育の課題から

##### (1) 道徳教育の課題について

群馬県の道徳教育の課題として、「校内の道徳教育の態勢が充実していない」「教師が道徳教育の重要性を認識していない」ことがあげられる。そのため、「全体計画に道徳教育で目指す子ども像が明確でない」「年間指導計画に道徳教育の重点項目が明瞭でない」「道徳の時間が確保されていない」「教師の協力体制が不十分である」などの改善すべき点が浮き彫りになってくる。そこで、改善の視点として、「校内での道徳教育の研修を充実する」「学年間の共通理解と実践を行う」ことがあげられる。そして何よりも教師一人一人が「心の教育」の重要性を自覚し、情熱をもって道徳教育にかかわっていくことが重要である。

##### (2) 道徳の時間の課題について

学校の道徳教育は、道徳の時間を要として教育活動全体で進めることが大切である。そのために、まずは道徳の時間を確保し、授業を実践することである。また、校内・学年の協力体制のもと、「魅力ある授業」「心に響く感動のある授業」「子どもが本音を語り、互いに高め合う授業」を目指すことである。さらに、資料の開発、教材の工夫、発問の工夫、チームティーチング(TT)の導入、体験活動との関連、家庭や地域社会との連携、ゲスト・ティーチャー(GT)の活用、『心のノート』の活用などの手だての充実・改善を進めていくことが大切である。そして、主題とする価値が学習指導要領の道徳の内容項目の分類の視点である「1」や「2」の視点に偏りがちであるので、人が自然や人間社会の中で生かされているという自覚をもつことの重要性を育むことから「3」や「4」の視点についてもバランスよく取りあげることも必要である。特に、「4」の視点は、集団や社会のかかわりから自己を見つめ、集団や社会のために貢献していこうとする心情を高めるものであるが、自校の生徒の実態を考慮し、『学習指導要領解説 - 道徳編 - 』を熟読し、計画的に授業を進めることが求められる。

##### (3) 「家庭・地域社会との連携」による道徳教育の推進について

『新ぐんま教育プラン』では、21世紀の子どもたちのために「4つの政策」を掲げている。

その1つが「心の教育と豊かな人間性の育成」である。昨今の青少年の問題行動などを見ても極めて重要な視点であると言える。また1つに「学校、家庭、地域社会の連携」が掲げられ、三者による子どもの健全育成を目指している。地域の子どもは地域で育てるという流れを取り戻さなければならない。A中学校（置籍校）では、「開かれた学校」を目指し、「学校公開日」を各学期に1度ずつ行っている。学校の様子や教科指導の概要などは保護者に理解されてきている。それをさらに開いて地域の人々の協力を得た授業を創造していくことが求められている。既に、総合的な学習の時間では「地域学習」「チャレンジウィーク」などの活動で地域の人々の協力を得ている。道徳教育の重要性をより理解していただくためにも家庭、地域社会との連携を図った道徳教育を創造していくことが重要である。

## 2 生徒の実態から

国際化の進展により、現代の子どもたちには、「地域社会や自国の文化理解」の基盤に立った「外国人との交流」「異文化理解」「国際貢献」などの「国際理解」の視野を広げ、「人権尊重」と「共生」の態度の育成が求められている。

これらの中での「外国人との交流」の項目について、A中学校における研究授業の予定学級の子どもたちのアンケート結果から、子どもたちより挙げられた「外国人との交流」での「心配や不安」なことを整理すると、A:「言葉が通じるのか」、B:「文化のちがひ」、C:「外国人の常識が分からない」の3点に集約される。言ってみれば、集約されたこの3点が子どもたちの「心のバリア」になっていると言える（【生徒用アンケート結果資料】は「資料編」参照）。実際、A中学校の子どもたちは、活動的で人との交流を臆するところはないのでこの国際交流における「心のバリア」がなくなればよりよい人間関係作りができるものと考えられる。「国際理解」の視野を広げ、「人権尊重」と「共生」の態度を育むためには、「心のバリアフリー」がなされなければならない。そのためには実際の交流体験という機会を通して、お互いのよさを発見し進んだ交流があれば、国際的視野に立った人と人とのかかわりもでき、互いに尊重し、存在の背景となる異文化の理解を深める機会を得ることができるものと考えられる。そのためには現在のような何気ない関係からさらにより深い心の交流が図られることが求められると考える。

道徳教育では、豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成することが重要とされている。道徳教育で目指す国際理解の価値を身に付けるためには、人と人のかかわりに焦点を当て、地域に根ざした日本の伝統・文化の理解と世界的視野に立った異文化の理解を通して、それぞれのよさや違いを認め、互いを尊重し共に生きようとする態度を育むことが必要であると考えられる。それは「桜梅桃李」のたとえにあるようにバラ科の花でもそれぞれが違った色・形・香りの花を咲かせ、異なった実を結ぶことを認め合うようなものである。

## 3 道徳的価値「国際理解・人類愛」の観点から

学習指導要領では、「国際理解・人類愛」の価値について「世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する」としている。また「教育改革国民会議報告」では、国際理解の基盤となる「伝統や文化を尊重する教育」に重点を置くように提言している。さらに『新ぐんま教育プラン』では進取の気性に富んだ先人たちに倣い、国際性や創造性豊かな子どもを育てることが重要であると示している。取組の方向として、感銘・感動する体験や活動の充実、優しさや思いやりの心を育む機会の充実等を挙げている。

それらを踏まえて、国際理解の基本的な態度とは、先人の智慧や偉業を見つめ、伝統・文化を尊重し、生まれ育ってきた地域や国の文化の違いを相互に尊重し、共に生きようとするものであると考える。こうした態度を育てるために、国際理解の視点から見た道徳的価値として、「郷土愛」「愛国心」「国際理解・人類愛」等が挙げられる。集団や社会とのかかわりについて

の視点から見れば、「家族愛」「愛校心」などとも深く関連している。どの価値も地域社会や国際社会に生きるためには他の人とのかかわりの大切さを自覚することが重要である。

また、「4」の視点の価値にかかわる道徳の授業には地域社会に生きるゲスト・ティーチャーとの交流を取り入れることが有効であると考えられる教師が多いことが分かる。子どもたちが価値を身近なものとして捉えることができるように道徳の授業の工夫・改善を図ることが重要である（【教師用アンケート結果資料】は「資料編」参照）。

以上のような理由で、本主題を設定した。

#### 研究のねらい

互いに尊重し共に生きようとする態度を育むために、以下のような手だてを講じ、道徳の時間の指導の在り方について実践を通して明らかにする。

- 1 道徳の時間における「集団と社会とのかかわりに関すること」の内容項目を関連づけ、人とのかかわりの大切さや文化のよさに気付くような学びを創るために「学習プリント」や『心のノート』等の学習素材を活用し集団や社会とのかかわりが意識的に広がるようにする。
- 2 価値を追求していく段階で、地域社会との連携を図り、地域に生きる人々とのかかわりを重視し、ゲスト・ティーチャーとの交流から自ら価値を見出すような学びを創造する。

#### 研究の見通し

次の見通し1～5に基づいて、道徳の授業実践に取り組むことで、心豊かにして、互いに尊重し共に生きようとする態度を育むことができるであろう。

- 1 地域社会との連携を図り、道徳の内容項目に関連した活動を行っている地域人材を道徳の授業のゲスト・ティーチャーとして招き、交流を図ることで、子ども自らがねらいとする価値を見出す学びが創造できるであろう。
- 2 学習活動のまとめや振り返りを重視した「学習プリント」の作成・活用と『心のノート』の積極的な活用を図ることで、人とのかかわりの大切さや文化のよさに気付くことができるであろう。
- 3 道徳の時間（全5時間）の、価値項目を関連づけ、「自他のよさの尊重」「郷土愛」「愛国心」「国際理解」「人類愛」へとつなぐことで、集団や社会とのかかわりの視点からの意識を広げることができるであろう。
- 4 学習プリントに「自己評価」の観点を設け、毎時間の自己評価を書き込む活動を取り入れることを通して、自己の学習の取組を継続的に振り返り、道徳的価値のつながりを考えることができるであろう。
- 5 ゲスト・ティーチャーと教師とのチームティーチングの形態として4パターンを構想し価値の内容項目や学習素材に合わせた形態を設定することで、学習効果の向上が図られるであろう。

## 研究の内容

### 1 基本的な考え方

(1) 「主として集団と社会とのかかわりに関すること」についての価値項目の関連

「国際理解・人類愛」の心情を育むには、その価値に至るまでの基盤となる心情を育むことが重要であると考え。すなわち、「集団や社会とのかかわりに関すること」についての価値は、関連し、連続しているものと見ることができる。具体的には、まず自己と他の人との関係からお互いのよさを尊重すること(2-(5))を出発点として、集団や社会とかかわることを通し、道徳的心情も「家族愛」(4-(6)) 「愛校心」(4-(7)) 「郷土愛」(4-(8)) 「愛国心」(4-(9)) 「国際理解・人類愛」(4-(10))と広がっていくものと考え。

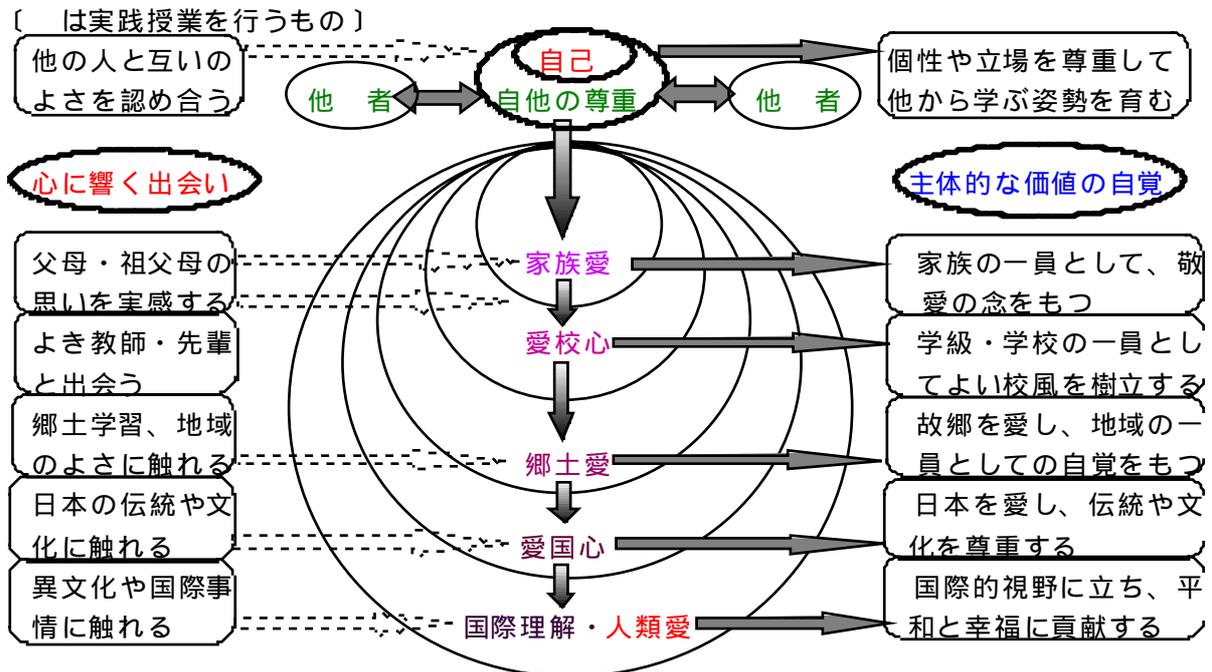


図1 価値の自覚につながるゲスト・ティーチャーとの心に響く出会い

それぞれの集団や社会の一員としての自覚をもち、互いに尊重し共に生きようする態度を育むためには、その集団や社会に生きる人々と交流する体験をもつことが大切である。そのためには、道徳の授業に地域社会に生きる人々をゲスト・ティーチャーとして招聘し、子どもたちの心に響く出会いの場を設定して交流を重ねることで、それぞれの価値について主体的に自覚され、国際理解・人類愛の心情を育てることができるものと考え。なお、実践授業に関わる価値の意識のつながりは、以下のように考える。

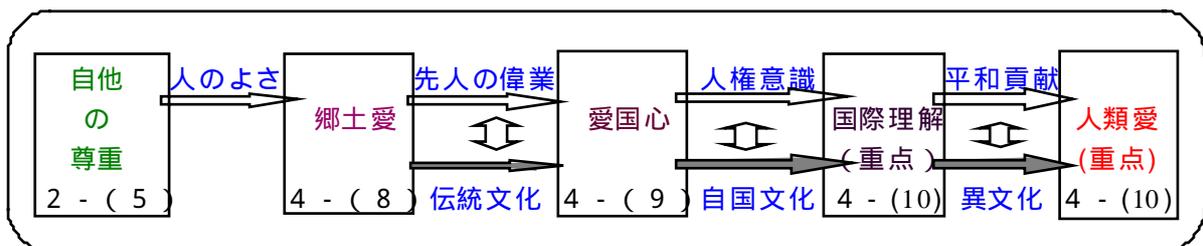


図2 価値関連における「国際理解」の意識のつながり

(2) 国際理解における人や文化との「かかわり」から見た子どもの姿

国際理解の視点に立つ時、子どもたちは、家庭、学校、地域、国や世界において、人や文化とのかかわりの中で生きて、生かされていることが明らかである。しかし、子ども自らがこの自覚をもたなければ、何気ない関係でしかない。それでは、自己の存在価値、集団や社会の一員としての自覚をもたないまま生活することになり、他を尊重し共に生きようとする態度は育たない。そこで、地域の人材や素材を生かし、子ども自らが他の人や文化との「かかわり」を通して、「お互いによさや違いを尊重し高め合う中で、平和な社会を希求して共に助け合って生きようとする態度をもった子ども」を育てることが可能であると考えます。

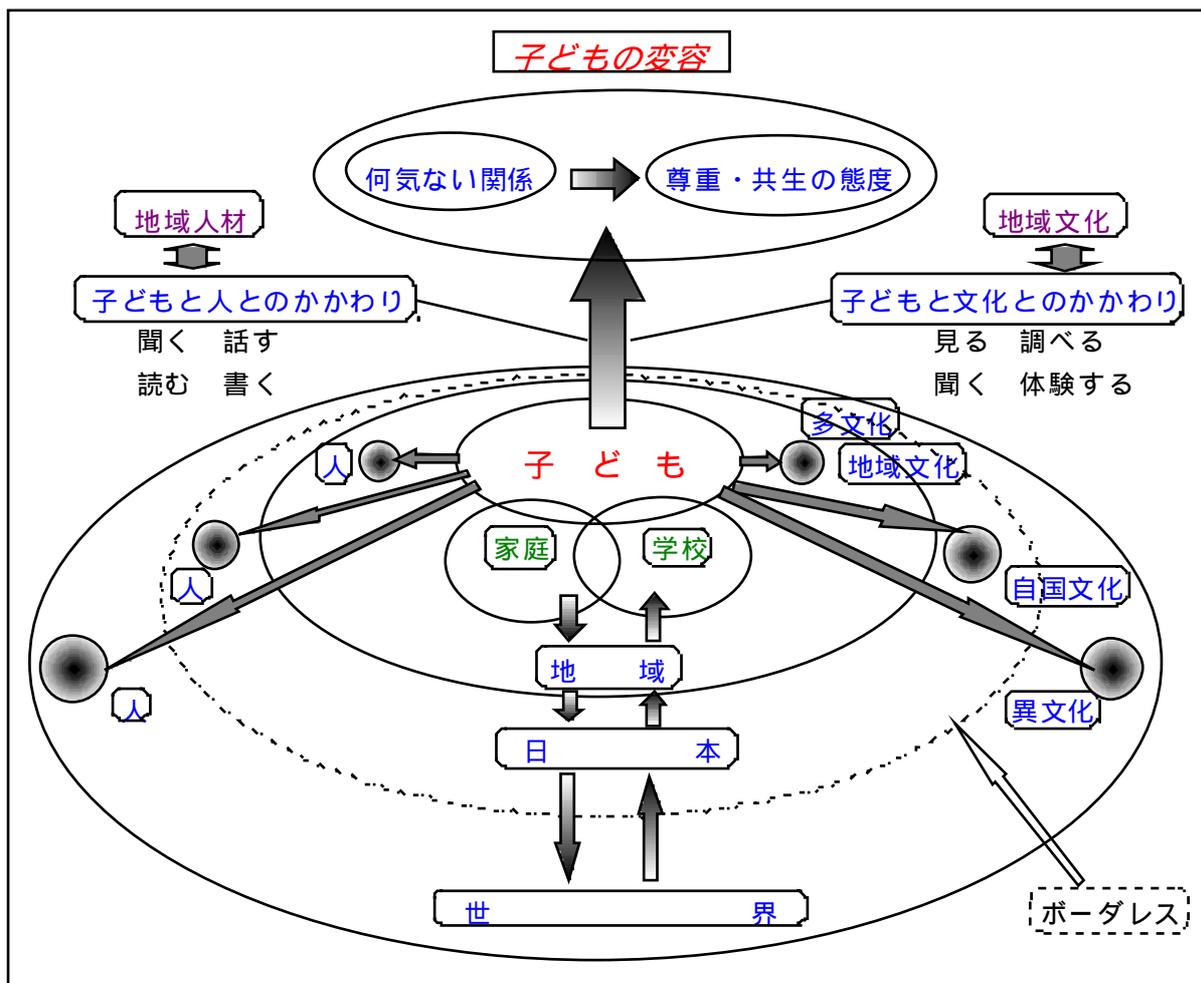


図3 国際理解における人や文化との「かかわり」から見た子どもの姿

(3) A中学校（置籍校）における「国際理解・人類愛」の価値の重点化

A中学校では、生徒・学校・地域の実態から全体計画や年間指導計画に「国際理解・人類愛」の価値を重点項目として取りあげている。ただし、現時点ではこの価値について学年段階の系統性と他の学習活動や体験活動との関連まで意識して計画されているものではない。そこで、第2学年を中心に次のページのような3年間を通しての学習の流れと重点化を構想した。

「国際理解・人類愛」の価値を重点項目として道徳の時間の指導を充実するためには、総合的な学習の時間や各教科等での体験的活動や学習内容と関連させたり、『心のノート』の継続活用をしたりすることが大切であると考えます。そして、1学年では、「家族愛」「愛校心」「郷

土愛」を、2 学年では、「郷土愛」「愛国心」「国際理解・人類愛」を、3 学年では、「愛国心」「国際理解・人類愛」を重点項目として、3 年間を見通した指導の充実が大切であると考える。

また、各学年の中でも、「集団や社会とのかかわり」に関する各内容項目を必ず扱うわけであるから、各内容項目を意図的に関連させて一年間の中で学べるよう配慮するとよいと考える。

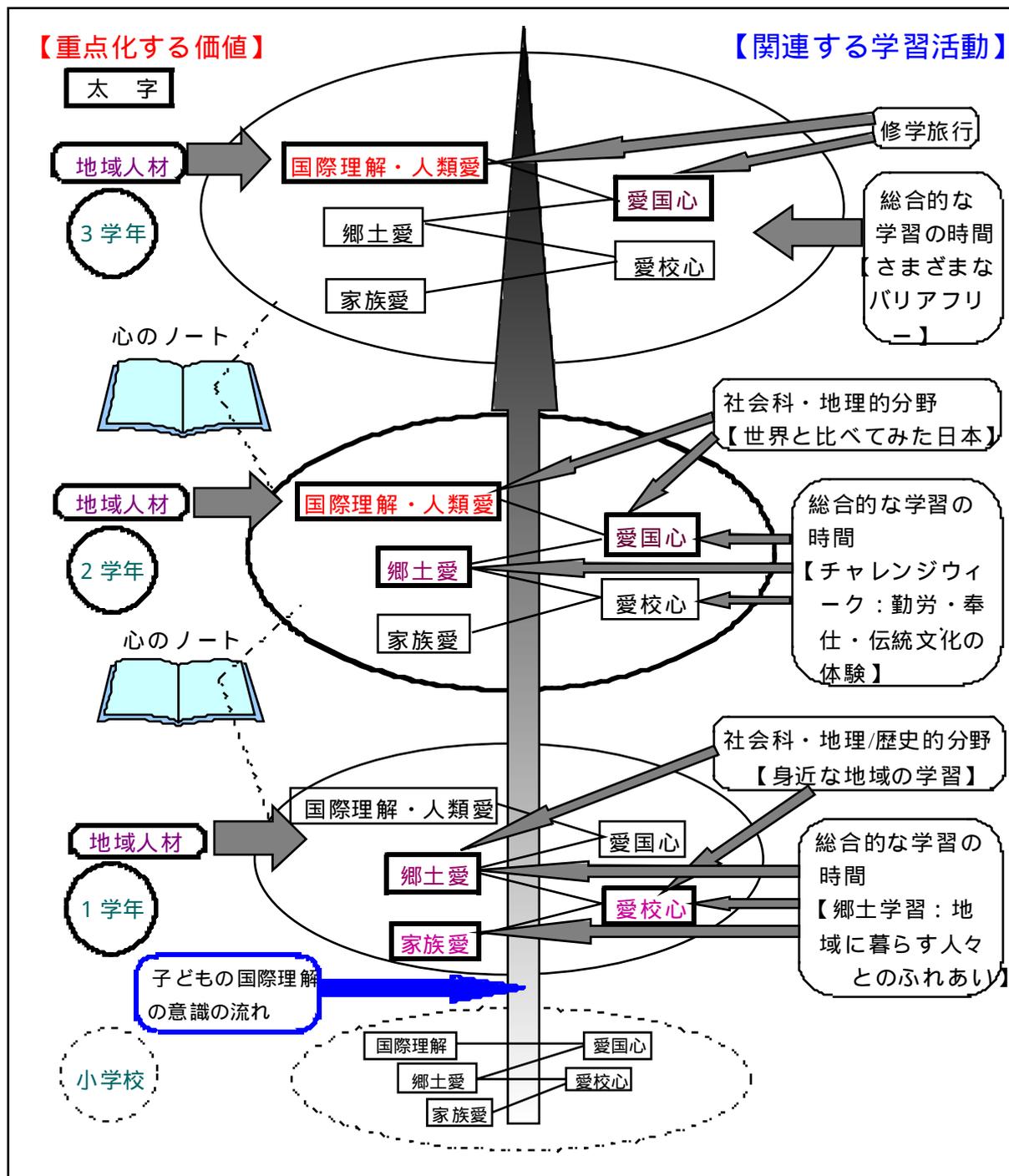


図4 A中学校(置籍校)における「国際理解・人類愛」の価値を重点化した3年間の学習の流れ

これは、アメリカ合衆国の環境・平和学者ヘンダーソン女史が指摘しているように、「国際理解」の目や態度を育成するためには、まず子どもたち自らが生活の場である足もとの地域課

題に気付き、自ら考え、実行し、解決していくようステップを踏んで取り組むことの大切さを主張していることにも通じる。即ち「Think globally ! Act locally!」である。学習指導要領では「国際社会で生きる日本人としての自覚が身に付く」よう期待している。そのためには、家庭や地域社会に生徒自らが関わっていき、他の人たちと共に同じ町に生き、共に町作りを行っているのだという自覚を育てていく必要があると考える。

(4) 「互いに尊重し共に生きようとする態度」を育むための地域人材の活用

ア 地域人材をゲスト・ティーチャーとして道徳の授業に活用する必要性

道徳の授業では、ねらいの根底にある道徳的価値を子どもが主体的に捉え、人間としての生き方の自覚を深めるよう指導することが大切である。特に「4」の視点の内容は子ども自身が集団や社会とのかかわりを通して自己の生き方を見つめていくものである。対象は広く、教室での疑似体験だけでは捉えにくい。教師のアンケートからも「取り挙げにくい」という結果が出ている。こうした課題を克服し、相互尊重と共生の態度を育むねらいに迫るために、地域に共に生き、専門性を有する人材を活用することが求められる。子どもたちに新たな出会いと学びの場を保障し子どもの可能性を引き出す手だてとして有効に働くものと考え。授業改善の方策として、従来型の道徳授業ではなくゲスト・ティーチャーの参加により地域社会と連携した授業を創造することで、子どもの視野や発想は地域レベルさらには国際的な広がりを持ち、自己とのかかわりから学ぶことで人権尊重と共生の態度を育めるものと考え。

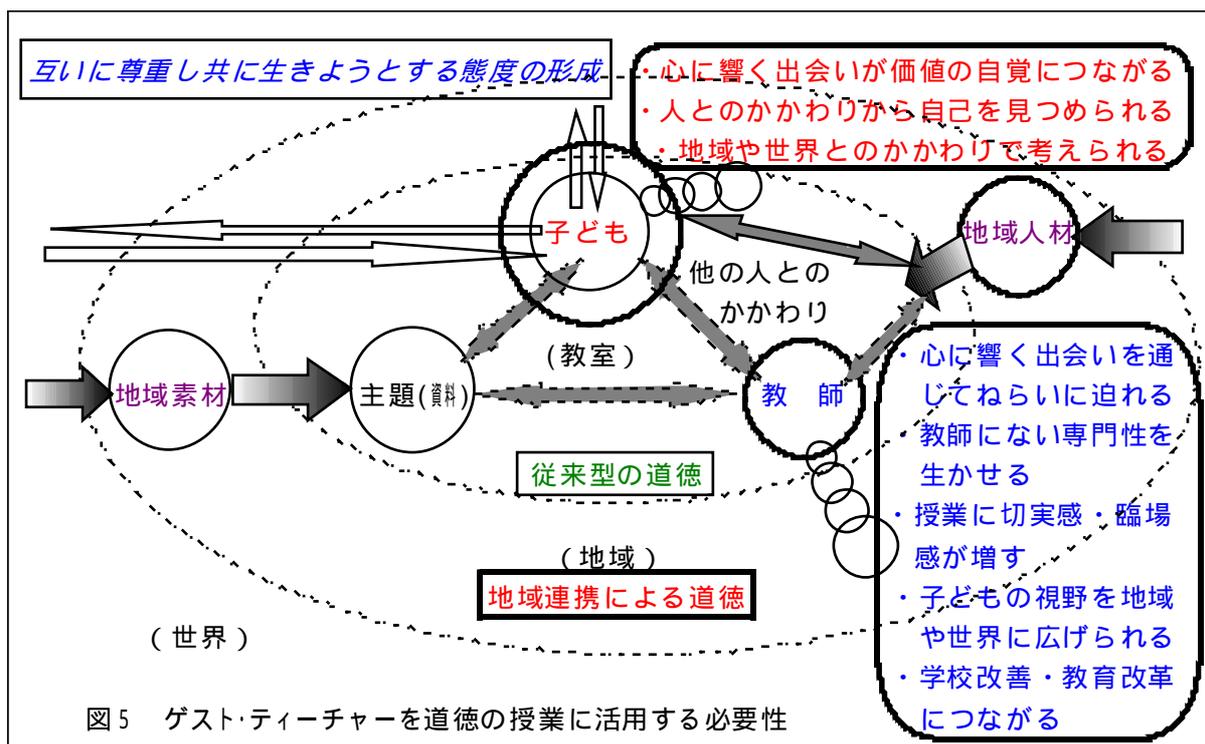


図5 ゲスト・ティーチャーを道徳の授業に活用する必要性

イ 子どもの変容をうながすゲスト・ティーチャーの選定

内容項目のねらいに則した地域人材を発掘することは言うまでもない。それ以外にも、次のような条件からゲスト・ティチャーを選定することを想定した。

- (ア) 地域人材との出会いが子どもの心に響くものとなり、道徳的価値の自覚につながる。
- (イ) 人の生き方に触れ自己を見つめ、価値について自己の生き方を振り返ることができる。
- (ウ) その人の話から自己と地域や世界とのかかわりを自覚し、共生の重要性を実感できる。

ウ ゲスト・ティーチャーを活用した題材の関連

ゲスト・ティーチャーを活用した授業では、各内容項目につながりをもたせられるように、「振り返りの場」を設定し、子どもが道徳的価値の関連性を自覚できるようにする。

エ ゲスト・ティーチャーと教師とのかかわり

学習の主体は子どもである。教師のリーダーシップのもと道徳の授業のねらいに迫るために、心に響く話、ワークショップでの話合いの支援などにかかわってもらうようにする。

オ ゲスト・ティーチャーとTTを組む道徳の授業場面

地域社会に生きる人材をGTとして招き、道徳のTTとして授業展開を組む「4パターン」を以下のように構想した。パターンを変える理由は子どもが主題に対して身近に感じ学びを深めるためにGTの有する特性、専門性を適切に生かすことを意図して形態を変えるものである。

表1 ゲスト・ティーチャーとのTT活用の4パターン (GTとは、ゲスト・ティーチャーの意。)

パターン	パターンA	パターンB	パターンC	パターンD
展開	導入重視型	ワークショップ型	展開・終末重視型	一連掛け合い型
導入	<p>GT) 本時の学習主題に関係する話題の提供を行う。以下子どもの質問を受けたり教師のサポートを行う。</p>  <p>日本赤十字社職員の話 (VTR出演)</p>	 <p>郷土史家との交流</p>	 <p>郷土史家との交流</p>	<p>GT) 教師のリードのもとで本時の学習主題に関係する話題提供を行う。教師との掛け合いで意欲を喚起する。</p>
展開	 <p>在住中国人講師とのロール・プレイ</p>	<p>GT) ワークショップ(演習)形式の学習において、プレゼンテーションを行ったり、演習の推進役を務める。</p>	<p>GT) 価値追求のための話合いに関する話題を提供する。また、教師とともに学習支援の活動を行う。</p>	<p>GT) 子どもの学習を支援する手だてとして教師との掛け合いを行い、学習に広がりをもてるようにする。</p>
終末	 <p>振り返り</p>	 <p>ワークショップ</p>	<p>GT) まとめの段階で子どもの発表について学習のねらいに則してコメントを寄せる。</p>	<p>GT) 一連の学習の様子から気付いたことを学習のねらいに則してコメントを寄せる。</p>

上記の表のように、学習の主題・場面に応じてゲスト・ティーチャーとのTTのパターンを変えるものとする。それに伴って子どもの価値追求に対してより充実した支援ができると考える。子どもが道徳的価値を具体的な場面において、身に引き寄せて考えられ、価値にかかわる経験や専門性を有する人材を授業に招き、教師とともに子どもの学習に積極的にかかわることによって自分の考えを深めることができる。

2 研究計画

(1) 授業研究の推進計画

下記のような授業研究計画に基づいて、研究主題に迫る実践的な研究を推進する。

<p>子どもの姿 (意識の変容)</p>	<p>授業(主題)名 ねらい</p>	<p>(上段)項目・心のノート (下段)地域人材 / TT</p>	<p>準備 (資料・教材)</p>
<p>自他のよさに気付いていない ↓ じっくりかかわりよさを認め合う ↑振り返り</p>	<p>10月9日・木 “お互いのよさを発見しよう!” それぞれの個性や立場を尊重し色々なものの見方や考え方があることを理解し、他から学ぶ広い心をもつ</p>	<p>2-(5) 自他の尊重 心のノート 54~57頁 間接 地域の農家の方から提供されたじゃがいも(生徒数)</p>  <p>じゃがいもを見つめて</p>	<p>ラルフ・ベットマン著福田弘訳『新版人権のための教育(職業にすぐ使える活動事例集)』明石書店2003年146頁所収のアクティビティー 相田みつを詩「みんなほんもの」(相田みつを著『親子で見るころの詩』相田みつを美術館2003年所収)</p>
<p>権現山の価値を想像する ↓ 日本を代表するものを誇りにもつ ↑振り返り</p>	<p>10月23日・木 “権現山と相沢忠洋(地域のよさを発見しよう!)” 郷土を愛し、社会に尽くした先人に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に務める</p>	<p>4-(8) 郷土愛 心のノート110~113頁 直接 郷土史会会長(権現山の歴史研究者) パターンC 郷土の話から課題解決の意欲を喚起し、話合いの充実が期待できる。</p>	<p>相沢忠洋著『岩宿の発見 - 幻の旧石器を求めて』講談社 1969年 長井謙治(中学2年生)作「相沢忠洋『岩宿の発見』を読んで」(青少年読書感想文内閣総理大臣賞1992年)</p>
<p>伝統的なものを発見する ↓ 伝統の継承と保護に努める ↑振り返り</p>	<p>11月20日・木 “日本の伝統や文化に誇りをもっていますか?” 日本人としての自覚をもって国のよさに気づき優れた伝統の継承、文化の創造に貢献する</p>	<p>4-(9) 愛国心 心のノート114-117頁 直接 文化財保護指導委員(日本や地域の文化財に詳しい) パターンD GTの専門性で学習の幅を広げ話合いを深められる。</p>	<p>編纂委員会著「日本画の美 - 東山魁夷」(『中学道徳1』光村図書 2002年112~113頁所収) 東山魁夷画「濤声」 「道」の複写 地域に点在する文化財の写真</p>
<p>外国人との交流上の問題点に気付く</p>	<p>11月27日 “近くて遠い国それは... (真の国際理解について考えよう!)”</p>	<p>4-(10) 国際理解 心のノート118~119頁 直接 在住中国人(中国料理店・貿易会社経営)</p>	<p>王貞治著「国」(原典『回想』けい文社 1983年)(『かけがえのないきみだから中学生の道徳1年』)</p>

<p>自他を尊重する</p> <p>振り返り</p> <p>世界で進行中の問題を認識する</p> <p>共生の手だてを考える</p>	<p>日・木</p> <p>世界の中の日本人としての自覚をもち身近な地域の国際化から国際貢献に務める</p>	<p>パターンA</p> <p>導入部で課題の本質は何かとの疑問をもたせ、GTと共に課題解決できる。</p>	<p>学研 2002年 136～139頁所収)</p> <p>王貞治肖像写真3枚(ホームラン世界記録時、監督の胴上げ)</p>
	<p>12月4日・木</p> <p>“愛は地球を救う(世界平和のためにできることは?)”</p> <p>世界の中の日本人と国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する</p>	<p>4-(10)人類愛</p> <p>心のノート120～121頁</p> <p>間接 日本赤十字社職員(VTR)(海外救援活動に当たる)</p> <p>パターンB</p> <p>より具体的なワークショップを通して考えが深まる。</p>	<p>日本赤十字社編『児童生徒のための国際人道法ワークブック』</p> <p>同社 2002年 所収のワークシート</p> <p>日本赤十字社作成の「対地雷模型」「写真パネル」「国際活動写真パネル」</p>

(2) 授業研究の視点(全5時間計画)

授業研究を進めるにあたって「授業づくりのポイント」を学習指導案の冒頭に示し、授業改善に努める。全5時間の道徳授業を価値の関連でつなぎ、各授業にゲスト・ティーチャーや地域文化・地域素材を取り入れることで効果的な授業が展開できるものとする。

各授業の「授業づくりのポイント」は、下記の表の通りである。

表2 授業づくりのポイント

	主 題	授業づくりのポイント(授業研究の視点)
第1時	お互いのよさを発見しよう! (自他の尊重)	“国際理解”シリーズ学習の「ガイダンス:5ポイント」を行う。地域素材や詩を活用して発問を工夫し、価値把握の段階で自らの問いをもち、価値追求の段階では自他のよさに気付くことができる。
第2時	権現山と相沢忠洋 (郷土愛)	展開場面においてゲスト・ティーチャー(郷土史家)の話から歴史的・国際的価値を有した文化財の存在に気付き、保護・保存の対策を考えることで我が郷土に誇りをもつ態度を育てることができる。
第3時	日本の伝統や文化に誇りをもっていますか? (愛国心)	授業の主資料として、「東山魁夷の日本画」を取り上げ、生徒とゲスト・ティーチャー(文化財保護指導員)との交流活動を行うことで、自ら日本の伝統美や日本文化のよさに気付き、日本の伝統や文化に誇りをもつことができる。
第4時	近くて遠い国それは..... (国際理解)	導入場面においてゲスト・ティーチャー(在住中国人)の「偏見・差別を受けた体験談」を聞くことで主価値である真の国際理解を深め、身近な国際化から国際理解に努める態度を育てることができる。
第5時	愛は地球を救う	展開場面で戦時での人権グループワークや日本赤十字社職員への国

5 時	(人類愛)	<p>際活動のインタビュー視聴を取り入れ、平和の大切さに気付き、互いに尊重し共生するための国際貢献の態度を育てることができる。</p>
--------	-------	---

(3) 検証計画

下記のような手順に基づいて、授業研究についての検証を行うものとする。

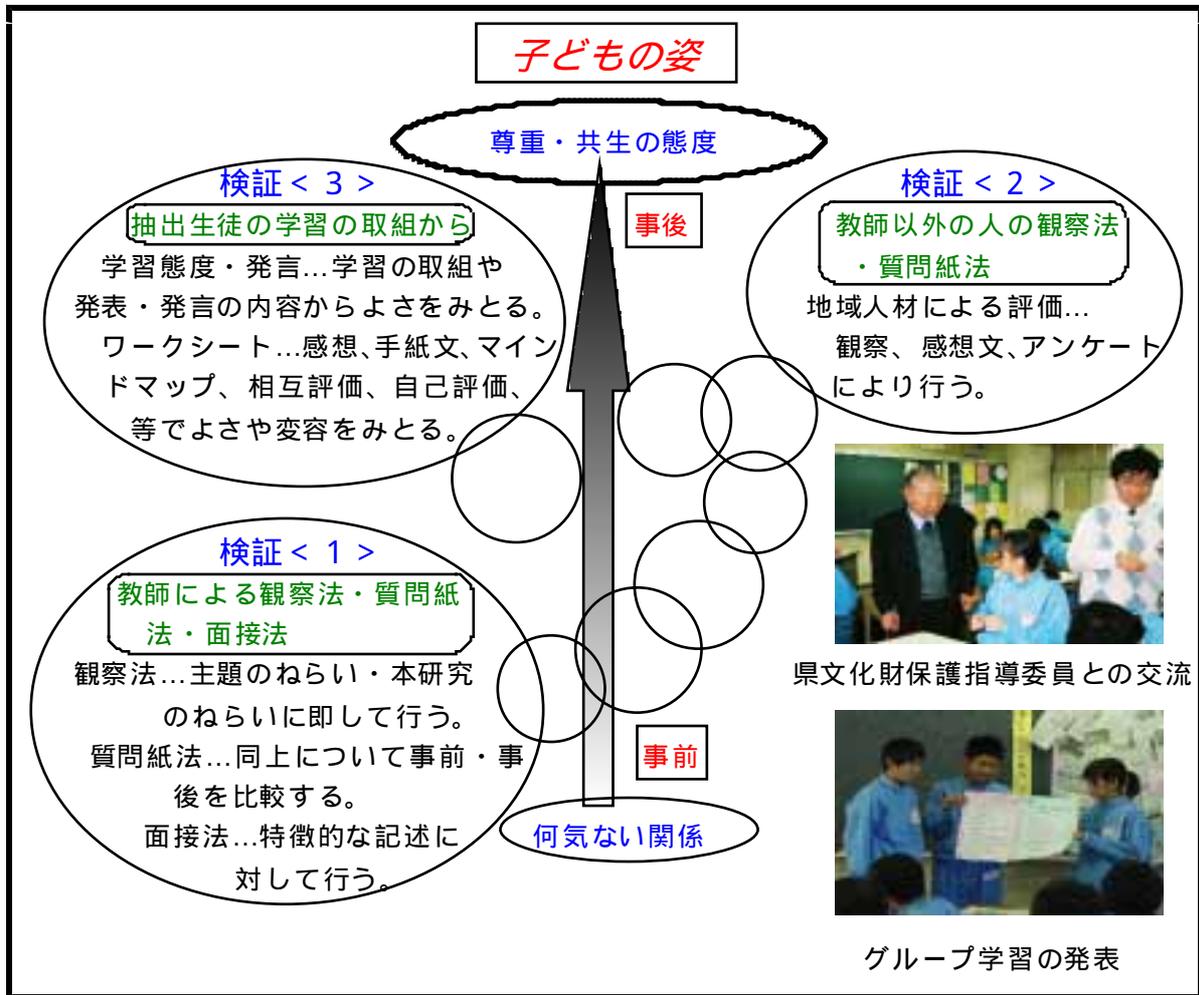


図6 検証の場と計画

3 実践の概要及び結果と考察

(抽出生徒の国際理解アンケートの実態) [事前アンケート(平成15年7月15日実施)より]

A子...外国人との交流で大切なことは「言葉のつかい方やジェスチャー」と考え、“世界平和”から「幸せ、交流 - 理解、平等 - 自由」をイメージしている。

N子...外国人との交流で大切なことは「偏見をもたない」「日本人としてはずかしくない振る舞いをする」と考え、“世界平和”から「ピースメーカー、戦争がない - 苦しむ子どもたちがいない、幸せ、自然がある - 美しい」をイメージしている。

M男...外国人との交流で大切なことは「お互いに尊重し合う」と考え、“世界平和”から「仲よし - 友達 - 頼りになる」をイメージしている。

(1) 地域社会と連携を図り、道徳の内容項目に関連した活動を行っている地域人材を道徳の授業のゲスト・ティーチャーとして招き、交流を図ることで子ども自らがねらいとする価

値を見出す学びが創造できたか。（見通し1）

#### ア 実践の概要

第1時では友達とのかかわりを振り返り、自己を見つめ直した。第2時以降は「集団や社会とのかかわり」に関する内容項目に添って、地域人材との交流を通して学びを広げることができた。第2時の「郷土愛」の学習では、地元の郷土史家から地域の文化財「権現山遺跡」における歴史的・国際的な価値について学び、「文化財の保護・保存」についてグループで話し合い、交流した。第3時の「愛国心」の学習では、地元の県文化財保護指導委員とともに東山魁夷の日本画を鑑賞し合うことを通して、「日本文化の伝統的価値と継承者の必要性」について学び、自分自身の思いを出し合って、意見交流を行った。第4時の「国際理解」の学習では、地元在住の中国人経営者から日本の生活を通して気付いた「日中文化の違い、受けてきた偏見や差別の体験談」を聞いた後、グループ別に道徳資料における場面を再現する人間交流に関するロールプレイを行い、心の交流を図った。第5時の「人類愛」の学習では、青少年赤十字活動の母体である日本赤十字社群馬県支部職員（VTR出演）から「平時・戦時にかかわらず生命尊厳の立場と人道の精神で取り組む日本赤十字社の国際活動の実際」の話聞き、それを受けて戦時での人権保障はどこまで守られるかを考えるグループワークショップを行った。

#### イ 結果と考察

専門家がその道のことを話し、グループ学習やロールプレイを支援したことにより、毎回生徒の学習に対する興味・関心が非常に高まった。それは、第2時以降、生徒が書いたゲスト・ティーチャーへの手紙文の内容からも明らかである。生徒全員が、4人のゲスト・ティーチャーとの心情を揺さぶるかかわりを通し、感動、感激と感謝の思いを綴っている。手紙文から価値との関連でゲスト・ティーチャーの効果を捉えることもできる。さらに、生徒が価値の内容項目にかかわる「人と人とのかかわりの大切さ」や「文化のよさ」に気付き、価値に向き合おうとしていることが分かる。

抽出生徒のA子は、ゲスト・ティーチャーとの道徳学習（第2時～第5時）について手紙に、

「この殖蓮地区について、知らなかったこと（文化）がいきなり知られたようで、うれしいです。」（第2時）

「今日、本当に、日本（文化）について話をしてくださり、とてもよかったです。」（第3時） 「差別について、ご自身の経験やご家族の経験を聞かせてもらい、うれしく思います。この世の中に差別があることは悲しいことです。けれども、その差別をなくし自由に平等で過ごせたらいいなと今日の話聞き、いっそう強く思いました。」（第4時） 「戦争などで苦しんでいる人々がいると思うと、私たちが幸せだということが、よく分かりました。その苦しんでいる人のためにも、ささいなこと、たとえば、募金などをできていければいいなと思いました。」（第5時）

と綴り、「国際理解」に関して、地域や日本文化のよさ、差別や戦争の悲惨さに気付き、積極的に自分の意見綴れるまでに変容している。（【資料1】参照）

#### 資料1 A子の手紙文

##### 第4時：在住中国人への手紙



##### 第5時：日本赤十字社職員への手紙



N子は手紙に、

「今回お話していただいたことを、次に権現山に行くようなことがあれば、思い出しながら、そのことについていろいろ考えながら歩いてみたいと思います。」(第2時) 「日本は、本当に素晴らしい国だということを星野さんのお話を聞いて強く思いました。私も、日本のこの伝統や文化を受けついでいきたいです。」(第3時) 「周先生の話聞いて、海外(日本)での偏見や差別は思ったよりもたくさんあるのだなぁと思いました。私も(周先生と同意見で)同じ地球上の人間なのにどうして偏見や差別をするのだらうと思います。」(第4時) 「この国際理解に最も必要なことは、どんな人とでも仲よくするということなのだと思いました。戦争で五体満足ではない子どもを見て、どうして自分と同じ人間を傷つけないければならないのかと悲しくなりました。」(第5時)

と綴ったことから、郷土愛、愛国心、人類愛の心情の高まり、心の変容を読み取れる。(【資料2】参照)

(ゲスト・ティーチャーの評価)

ゲスト・ティーチャーには自由記述のアンケートで生徒の学習の取組を評価してもらった。郷土史家・井下久吉氏は、「和やかで真面目な姿を拝見させていただき、この人達が地域社会のため、日本のため、真の世界平和のために育ちゆくのだと思ったとき心底から頼もしく嬉しく感じられました。」との期待の声を寄せられた。また、県文化財保護指導委員・星野正明氏は、母校の教壇に立てたことに感謝しながら「授業に楽しく取り組んでいる。グループ毎の学習にも意欲的で非常に良かったと感じた。授業後の挨拶も好感がもてるものであった。」と取組のよさを賞賛する声を寄せられた。このような評価からも地域人材の活用が、生徒の学習に大変効果的であったと言える。(【資料3】参照)

(2) 学習のまとめや振り返りを重視した「学習プリント」の作成・活用と『心のノート』の積極的な活用を図ることで、人とのかかわりの大切さや文化のよさに気付くことができたか。(見通し2)

ア 実践の概要

「国際理解」学習では、価値をつないで学習を進めた。生徒が「人と人とのかかわり大切さ」と「文化のよさ」という課題に気付き、自ら毎時間の学習のまとめや振り返りができるように「学習プリント」を活用した(「学習プリント」の実例は「資料編」参照)。作成の留意

## 資料2 N子の手紙文

### 第3時：県文化財保護指導委員への手紙



### 第5時：日本赤十字社職員への手紙



## 資料3 ゲスト・ティーチャーからの手紙文 郷土史家からの手紙



点は、学習の流れに沿って考えや思いが綴れること、授業時間内で書き上げられること、人の思いや文化のよさに気付くように吹き出し式や文章完成法などの手法を取り入れることである。また、『心のノート』は、ねらいとする価値がデザイン文字やイラストによってイメージしやすいので「学習プリント」との併用を行った。『心のノート』は、価値についての書き込み欄が用意され、見開き2ページの文字や見出しとともに自分の考えや思いがまとめやすくなっているため、生徒は価値に対して重層的に向き合うことができた。

#### イ 結果と考察

毎回の学習で、「学習プリント」を綴ったことは効果的であった。それは、自分の考えや思いを文章（文字）にすることで、一旦自分を振り返り、さらに、「学習プリント」を再度確認することで、次の学習との関連を考えることができたからである。また、『心のノート』は、問いかけ文が平易に書かれているため、自分の思いを率直に綴る上でも役に立った。

以下は、抽出生徒の各時間の価値の内容項目に対する「学習プリント」と『心のノート』の記述の相関を明確化し一覧として表わしたものである。

#### (7) M男の事例

	価値の内容項目	「学習プリント」の記述	『心のノート』の記述
第1時	2 - (5) 自他の尊重	「友達とのかかわりを振り返って、」話を最後まで聞かない。なんでか他人まかせ。	学習プリントを活用した学習 
第2時	4 - (8) 郷土愛	「土器や石器などの遺物は、」みんなのものだから自分勝手にこわしたりしてはだめ。	(授業内活用)《ふるさとにできることはなんだろうか》 看板などに文化の大切さを書いてみんなにみってもらう。
第3時	4 - (9) 愛国心	「わたしは星野先生のお話をうかがって、」日本文化はとてもよいものだと思います。東山魁夷画伯の絵を眺めているんなことを感じられた。	(事後活用)《わたしは日本のよさをこう考えている》 自然を大切にする心。
第4時	4 - (10) 国際理解	「わたしは岡先生のお話をうかがって、」国際化を深めるためには偏見や差別をなくさないといけないと思いました。	(事前活用)《異文化に接した経験、そして考えたこと》 インド人は右手でご飯を食べる。 中国の人は自転車をよく使う。
第5時	4 - (10) 人類愛	「わたしは、「世界平和」のために、」募金や呼びかけができる。	(授業内活用)《この星の一員として考えること、思うこと》 世界中が平和になって楽しく毎日をすごせるようになってほしい。

M男の記述を分析すると、各学習における「学習プリント」と『心のノート』にはそれぞれ関連のある記述がされている。同時に併用した場合は、問いに対する答え方の相違はあっても内容は非常に関連を示している。『心のノート』を学習の事前・事後に用いてみると、授業を通して心情が変容したことを読み取ることができる。また、授業間の意識のつながりが、郷土愛から愛国心へ、国際理解から人類愛へとつながっていることが分かる。このことからM男は、当初「友達とのかかわり」が消極的であったが、道徳“国際理解”シリーズ学習を通じて人と人とのかかわりの大切さと文化のよさに気付き、「世界を平和にするには、お互いの国の文化の違い、よさなどを認め合うこと」との思いをもつようになったと考えられる。

(1) A子の事例

	価値の内容項目	「学習プリント」の記述	『心のノート』の記述
第1時	2 - (5) 自他の尊重	「友達とのかかわりを振り返って、話を聞かないことがある。自分の気持ちを言いすぎることがある。考えがあやふやになってしまうことがある。」	学習プリントや『心のノート』にまとめる学習 
第2時	4 - (8) 郷土愛	「土器や石器などの遺物は、過去のことを知る大切なものだからこれかもしっかり残していかなきゃいけない。」	(授業内活用)《ふるさとにできることはなんだろうか》 未来の子にも、歴史を知ってもらうために、しっかりと残しておこうと思う。
第3時	4 - (9) 愛国心	「わたしは、星野先生のお話をうかがって、「この地域にもなそとなることがあるのだなあと思いました。星野先生はすごいなあと思いました。」	(事後活用)《わたしは日本のよさをこう考えている》 その場所、その場所によさがあり、特徴がある。
第4時	4 - (10) 国際理解	「わたしは、周先生のお話をうかがって、「差別などを受けてもがんばってきたことにすごいなあと思いました。差別のない世界ができたらいいなあと思いました。」	(事前活用)《異文化に接した経験、そして考えたこと》 言葉の違いがあっても、ジェスチャーなどで心が通じ合うと思います。
第5時	4 - (11) 人類愛	「わたしは、「世界平和のために、」少しのことでもいい、1円の募金でもいいからやりたいと思いました。」	(授業内活用)《この星の一員として考えること、思うこと》 小さな協力をみんなでやっていき、他国の人々が幸せになってほしい。

A子は、身近な友達とのかかわりにおいて、「話を聞かない」ことがあったり「考えがあやふやになってしまう」自分に気付いていた。第2時以後、ゲスト・ティーチャーとの交流をもち、地域社会や世界の実情に触れることを通し、他者や文化へのかかわりに対して、積極的な考えや思いを「学習プリント」や『心のノート』に綴るようになった。それは、交流を通じて自分の中に問いが生じ、「学習プリント」や『心のノート』に率直に自分の考えや思いを綴るようになったものと考えられる。

(3) 全5時間の道徳の時間を、価値項目を関連づけ、自他のよさの尊重にはじまり、郷土愛、愛国心、国際理解、人類愛へとつなぐことで、集団と社会とのかかわりの視点から意識を広げることができたか。(見通し3)

#### ア 実践の概要

集団と社会にかかわる「4」の視点における国際理解に関連する内容項目を中心に全5回にわたる「道徳“国際理解”シリーズ学習」の授業を実践した。

第1時の授業では、はじめに、道徳“国際理解”シリーズ学習の「ガイダンス」を行った。ガイダンスでは、“国際理解”の基本となる「5ポイント」を示し、主体的な「かかわり」が基盤になることをはじめ、「違い」や「よさ」の認め合うことなどが大切であることを確認した。(【資料4】参照)

国際理解は、あくまでも自分が出発点であり、自分と家庭や学校という集団での人とのかかわりが、やがて地域社会や日本、世界へと、人だけでなく人が創出してきた文化にも着目して視野を広げていくことが重要であると共通理解した。ガイダンスでは、国際理解「かかわり」の広がりを図にして視覚的に示した。(【図7】参照)

第1時では、ガイダンスのあと、地域の農家から提供していただいた「芽つきのじゃがいも」を一人一人がじっくりとかかわり観察し、気付いたことを五つ以上書き出すアクティビティーを行った。これにより自らかかわりをもつことにより様々な発見があることに気付いた。また、友達とのかかわりの現状を見つめ直し、希薄な人間関係では互いのよさが発見できないことにも気付いた。さらに、相田みつをの「みんなほんもの」の詩を読み合い、互いのよさを発見し尊重し合って生きることこそ「ほんものの生き方」であると実感した。

第2時以降は、ガイダンスで確認した「人と人とのかかわり」や「文化のよさ」を発見するという問いを生かして一連の学習を行った。その学習では、国際理解の視点から人や文化に焦点を当てた資料を用いて、発展的につながりを意識して学習を行った。具体的には、第2時の郷土愛の学習では、『岩宿の発見』を読んで」という中学2年生の読書感想文を読み合い、考古学や郷土の文化財保護に貢献のあった先人・相沢忠洋の偉業と文化財のよさに着目して話し合った。その際、相沢忠洋が地域の文化財「権現山遺跡」で旧石器を発見したことに気付いた。これらのことにより郷土を愛する態度をもつことができた。

第3時の愛国心の学習では、第2時の学習を日本全般に視野を広げて考えるために、日本の

#### 資料4 ガイダンス・5ポイント

道徳“国際理解”シリーズ学習  
「ガイダンス・5ポイント」

- 1) 主体的なかかわりが基盤となる。
- 2) 「かかわり」が自分と身近な人とのかかわりから次第に広がっていく。
- 3) 違いを認め合う。
- 4) よさを認め合う。
- 5) 目的は個々の幸福実現と共に生き世界平和を創造する。

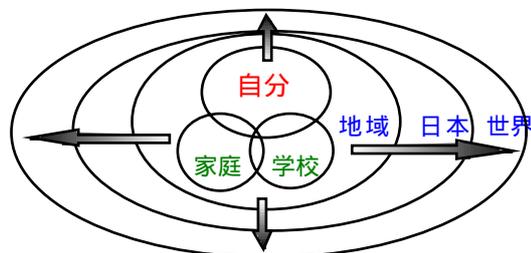


図7 国際理解の「かかわり」の広がり

伝統・文化を取り上げ、「日本画の美」という資料から古代より伝わる彩色技法を用いた日本画とこの伝統を現代において生命を吹き込んだ東山魁夷の偉業について話し合った。

第4時の国際理解の学習では、日本社会に暮らす在住外国人に対する異文化への無理解から生ずる偏見・差別を扱ったプロ野球監督王貞治執筆の「回想」を通して、国際化の進展に伴い、日本文化とともに異文化を理解することの大切さを実感した。

最終の第5時の人類愛の学習では、学校で取り組んでいる青少年赤十字活動の母体となっている日本赤十字社の国際活動を調べることを通して、戦争・飢餓・水不足・非識字地域などに対する人道の精神に基づいた活動から国際貢献の態度を身に付ける学習を行った。

こうして価値の関連を図って資料を選定したり、ゲスト・ティーチャーの活用を組み合わせたりすることにより、生徒が価値を身近に感じられるように意図して授業を実践した。

#### イ 結果と考察

価値の内容項目に照らし「国際理解」の視点から道徳学習をシリーズ化してきた。学級全体の結果から、価値の内容項目を関連したことによって、「集団や社会のかかわりの視点」について意識を広げることができた。7月に実施したアンケートでは「国際理解」についてのイメージは、「外国のことを知ること」「食文化が違う」「国際理解ポスターを描いた」「英語をしゃべり外国人と話すこと」「言葉や文化に違いがある」といった国際理解の一面を書いた生徒35人中34人、97.1%であった。しかし、道徳「国際理解」シリーズ学習を実践し、全5回を終了した時に描かれた生徒のマインドマップからは生徒35人中30人、85.7%の生徒が「国際理解」の本質としてのイメージを描いていた。それは、「自分の国をよく知る」「伝統を大切にする」「世界のことを知る」「お互いの文化を知る」「偏見や差別をなくす」「相手の国のことを考える」などや「歴史の大切さ」「異文化交流」「戦争」「平和」「協力」「助け合い」などのイメージである。また、このことは個別の生徒N子とM男の描いた「マインド・マップ」の事前のものとの最終の第5時に描いたものとの変化からも明らかである。（【図8・9】参照）

以上のように、生徒の学びの振り返りを読み取ることで、「国際理解」という視点をもって、これまでの学びを統合することができたと考える。これは、価値の内容項目の関連を図ったことにより人とのかかわりの大切さや文化のよさを尊重する態度が表れたと考える。

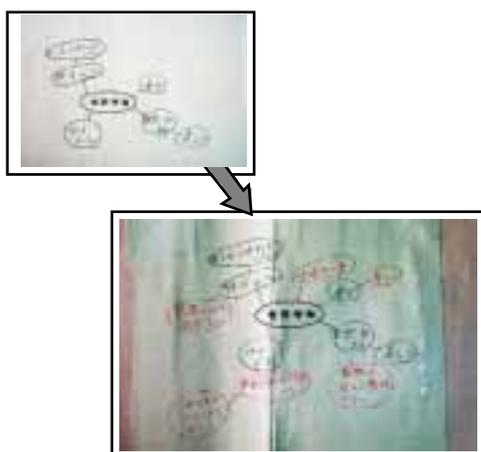


図8 N子のマインドマップの変化

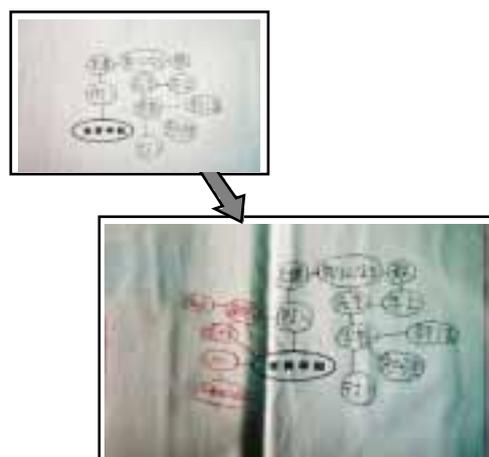


図9 M男のマインドマップの変化

- (4) 学習プリントに「自己評価」の観点を設け、毎時間の自己評価を書き込む活動を取り入れることを通して、自己の学習の取組を継続的に振り返り、道徳的価値のつながりを考えることができたか。（見通し4）

## ア 実践の概要

毎回、授業の終末で「自己評価」を行った。生徒は、学習の取組を振り返り、価値に対して自己を見つめ直すことができ、さらに次時への意識の継続が図られた。(【図10・11・12】参照) (「自己評価表」の実際例は「資料編」参照)

自己評価の観点は、以下の「5観点」である。この5観点について、各自5段階で自己評価するものである。

自分の問いをもって学習が進められた。  
じっくり考えて自分の答えがもてた。  
話合いに意欲的に取り組めた。  
主題についての自分の考えが深まった。  
生活にいかしていきたいと実感できた。

## イ 結果と考察

抽出生徒3人の学習観点別自己評価の結果は、右の図(グラフ)の通りである。3人ともに第1時の自己評価に対してより最終の第5時の自己評価の数値が上がっている。生徒全体でも出席者30人中24人、80%の割合で向上している。同じ数値の生徒は3人で10%、下回った生徒は3人の10%となっている。このように道德の国際理解学習をシリーズ化したことにより意識や学びの継続が図られ学習の達成感や充実感・充足感を十分高めることができたと考える。

A子について見れば、第1時は、と の観点到自己評価5を付けていた。第2時には、の観点到5となり、第3時には、の観点到5を付けている。第4時、第5時になると、全観点到5を付けている。学習の取組態度を見ても極めて積極的であり、「学習プリント」に書かれる内容からも意欲的な態度がうかがわれた。第1時の感想には「ふつうは習わないことを習えてよかった。残りの4回を大切にしたい。」、第3時の感想には「星野先生のお話がとても興味深い話でした。機会があったらまた聞きたいです。」、第4時の感想に「国際理解の授業は、やっぱり毎回おもしろいです。」、最終回の感想に「全5回の授業が行われて1回1回がそれぞれ違って楽しめました。今は遠くのことで身近に感じることができた。考え方が少し変わったりしていい授業でした。」と書いている。一回一回異なる授業でも、つながり、かわりを意識することで生徒の変容が生じたものとする。

N子は、第1時で の観点到5を付け、第2時では と の観点到5を付けている。第3時になると と の観点到5を付けている。第4時、第5時には、の観点到5を付けている。特に、の観点的「じっくり考えて自分の答えがもてた」については、毎回の自己評価に5を付けていたことから主題に迫る自分の取組を肯定的に捉えている。第5時の「学習プリント」には「今回

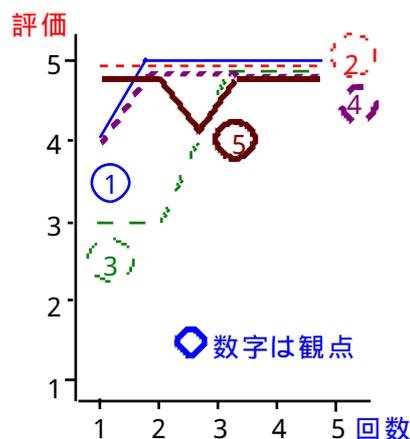


図10 A子の自己評価

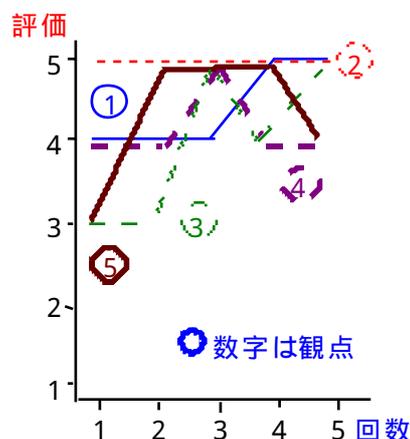


図11 N子の自己評価

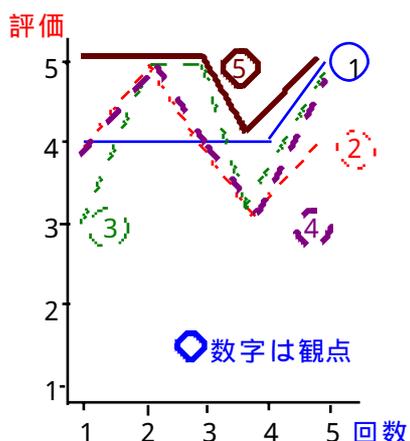


図12 M男の自己評価

は最終日だったのでがんばって取り組むことができました。長いようで短い間の国際理解の授業はとてもためになり、楽しかったです。」と振り返っている。

M男は、第1時から第5時まで大きく変動が見られるが、全5回を通して見たときにシリーズ学習全体を通して十分な変容があったと考えられる。特に、 の観点である「生活に生かしていきたいと実感できた」の結果から、極めて充実して学んでいたことが分かる。



平和について調べました！

(5) ゲスト・ティーチャーと教師のチームティーチングの形態として4パターンを構想し価値の内容項目や学習素材に合わせた形態を設定することで、学習の取組に向上が図られたか。(見直し5)

ア 実践の概要

従来行われてきたゲスト・ティーチャー（GT）の活用では、授業の一部で一方向の話をすることが多かった。道徳“国際理解”シリーズ学習では、GTの専門性や経験・体験を生かして、多様なTTの形態のもと生徒との双方向の学習を展開した。それは、生徒がGTとともに学ぶことで、国際理解の価値をより身近に捉え、価値追求の学びを深めるからである。価値の追求場面で、生徒がGTと教師の両者の支援を受けて積極的なかわりや意見交換が行え自ら価値に向き合うための支援を行った。構想したGTとのTTの形態を「4パターン」は、パターンA:導入重視型、B:ワークショップ型、C:展開・終末重視型、D:一連掛け合い型、である。このため「学習指導案形式」を変え、「支援及び留意点の欄」に「GTの欄」を設け、場面に応じてGTが主導して発問、説話も行うなどの役割を明確にした。



対人地雷パネル

(日本赤十字社作成啓発資料)

イ 結果と考察

GTとともにワークショップ、ロールプレイ、意見交流など多様な学習活動を行ったことで価値追求の学びが深められた。第5時（最終回）の授業のまとめに、生徒の中には「私はこのシリーズを通して以前より国際理解の考えが深まったと思います。実際に写真を見たり、みんなで考えたり、グループで考えたり、ゲスト・ティーチャーからのお話を聞いたりして……。私は今回学んだことを日常生活に生かし国際理解に関する活動などもやってみたいなと思いました。」と述べている生徒もあった。

N子は、「(井下さんから)権現山のことなどいろいろ教えてもらえてたくさんのが分かりました。」「(星野さんとの交流の中で)最後の『宝物の話』はとても良かったです。」「(周さんと)役割演技を楽しくやれました。」「松本さんの赤十字の話が印象的でした。」と感想を書いている。全5回の学習について「この国際理解では、戦争、偏見や差別など私たちの世界で解決していかなければならない問題についていろいろ考えることができました。」と振り返

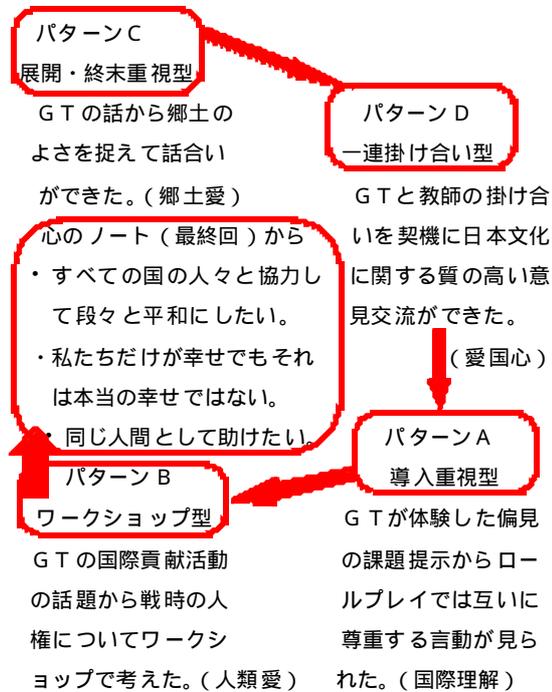


図13 GTとのTTによる学びの深まり

っている。M男は、「相互評価欄」にGTと級友のロールプレイを見て「Kくんは記者になりきっていたところがすばらしかった。」と友達を賞賛し、「(全5回のTTについて)おかげでとても楽しくそしてとてもわかりやすく授業を受けることができました。」と結んでいる。

最後に、生徒はGTとの多様なTTを通して国際理解について学びをつなぎ、より価値を主体的に追求することができたと考える。(【図13】参照)

## 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

地域社会と連携を図り、道徳の内容項目に関連した活動を行っている地域人材をゲスト・ティーチャーとの交流を図ることで、その人、その地域でなければ見出せない文化的な価値に触れることができ、生徒が自らねらいに迫る学びを創ることができた。

生徒自らの学びのまとめや振り返りのための「学習プリント」を作成し、『心のノート』と併用したことで、内面と向き合い重層的に価値を自覚することができた。

「国際理解」の価値の重点化を図るために、内容項目をつなぎ、全5時間のシリーズ学習を行ったことで、生徒自ら価値の関連を意識し、人と人のかかわりの大切さや文化のよさに気付く学びが進められた。「国際理解」の態度を育成するために、「国際理解」にかかわる価値の内容項目の関連を図り、重点的に授業実践を行ったことにより、単発の授業よりもずっと期待通りの効果があった。

生徒一人一人が自己に向き合って学習を振り返るための「自己評価」を取り入れ、学習の取組を見直すことができ、生徒は学習の継続性を意図して学びをつなげることができた。また、教師にとっては生徒の変容を的確に捉えることができ授業改善につながられた。

ゲスト・ティーチャーの活用を積極的に行い、GTとのTTの形態に変化をもたせることで、価値の内容項目や学習素材に合わせた学習の展開幅が広がり、生徒の学ぶ意欲を継続して喚起し、主体的な学習を促す効果があった。

### 2 今後の課題

真の国際理解の態度を養うには、異文化理解だけでは不十分であり、「郷土愛」「愛国心」などの価値とも意図的に関連付けることが重要となる。本研究は、「国際理解」の重点化を図るために「集団や社会とのかかわり」の項目を中心に引きあげたが、今後はそれ以外の内容項目との関連を図る可能性も探っていきたい。また、本研究を発展させて「環境と自分」「ボランティアと自分」などに重点をおいた研究を継続していきたい。

ゲスト・ティーチャーの活用が生徒の学びの支援に極めて効果的であったので、今後はGTとのTTの授業実践研究を蓄積し、さらに効果的な連携の在り方や多様な学習形態の工夫・改善、道徳学習における支援の在り方等について研究を継続していきたい。

### <参考文献>

- ・ 文部省 著 『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説 - 道徳編 - 』 財務省印刷局 (1999)
- ・ 文部科学省教育課程課 編 『初等教育資料 3月号臨時増刊 平成11・12年度地域の人材を活用した道徳教育推進事業研究報告』 東洋館出版 (2002)
- ・ 文部科学省 編 『心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開』 財務省印刷局 (2002)
- ・ 押谷 由夫 編・著 『教育技術 MOOK 新学習指導要領を生かした道徳の授業 NO.2 校長、他の教職員、地域の人々、保護者が参加・協力する授業』 小学館 (2002)
- ・ 佐藤 幸司 著 『心を育てる「道徳」の教材開発』 明治図書 (2002)
- ・ 荻原 武雄他 編著 『「生きる力」を育てる感動と感化の道徳授業』 明治図書 (1997)
- ・ 荻原 武雄・清水 保徳 編著 『問題解決としての道徳授業』 明治図書 (1999)

